

# 山口・極楽寺の観音菩薩（伝滝見観音）遊戯坐像

岩 田 茂 樹

## はじめに

山口県防府市岩畠に所在する曹洞宗極楽寺の観音堂に安置される観音菩薩坐像〔図1～15〕は、滝見観音として信仰される像で、左膝を立て、右足を垂下させつつ岩座に坐す。いわゆる遊戯坐の坐法を示すものである。遊戯坐像についてはこれまで、ほぼ鎌倉周辺に限って存在し、鎌倉時代後期になってあらわれるとする見方<sup>(1)</sup>もあった。しかし、かつて南北朝時代の作例とみなされた愛媛・等妙寺の菩薩（伝如意輪観音）遊戯坐像が、鎌倉時代前期にさかのぼる慶派仏師の作品と考えられ、臆測にすぎないものの等妙寺の本寺であった京都・法勝寺あたりからの移坐も視野に入れるべきとの指摘を行ったことがある<sup>(3)</sup>。ただそのなかで「等妙寺像の希少性は、日本で制作された遊戯坐像約十例において、本像以外には立て膝をする像がひとつもないという点にある」と記したのは誤りであった。極楽寺像はまさに、等妙寺像同様に左膝を立てる作品に他ならない<sup>(4)</sup>。

極楽寺像については、筆者の知るかぎり、これまで二度紹介がされている。ひとつめは山口県教育委員会が行った未指定文化財調査の報告書<sup>(5)</sup>、ふたつめは『防府市史』<sup>(6)</sup>である。いずれにおいても滝見観音として立項され、前者では南北朝～室町時代の作、後者におい

ては南北朝時代の作<sup>(8)</sup>としている。いずれの場合もその根拠として、高い宝髻、面長の顔立ち、複雑で大振りな衣文線などをあげる。

なお『防府市史』には、その伝来について次のように記している。

本像は、江戸時代までは牟礼<sup>むれ</sup>の田屋<sup>(9)</sup>にあった現観寺<sup>げんかんじ</sup>の観音堂の本尊として祀られていた。『防長風土注進案』によれば、もとは矢筈ヶ岳の八合目にあった験観寺<sup>けんかんじ</sup>の本尊で、大内弘世（岩田注…？一三八〇）が定めたという周防三十三観音霊場の第二十二番札所として大方の信仰を集めていたが、元亀二年（一五七二）に麓の田屋の地に移し、寺名もいつしか現観寺に改まったという。

現観寺は明治四年（一八七二）に廃寺となり、牟礼岩畠の極楽寺に合併した。観音堂は本尊仏とともに移されて現在に至っている<sup>(10)</sup>。

筆者は極楽寺像の調査を行う機会を得たが、その制作年代に関して、これまで考えられてきたより古いのではないかと私考する。以下に調査データを提示するとともに、若干の考察を行う。



図2 同 左斜側面



図1 観音菩薩遊戯坐像 正面 山口・極楽寺



図4 同 左側面



図3 同 右斜側面



图6 同 背面



图5 同 右侧面



图9 同 头部右斜侧面



图8 同 头部左斜侧面



图7 同 头部正面





図12 同 頭部背面



図11 同 頭部右側面



図10 観音菩薩遊戯坐像 頭部左側面  
山口・極楽寺



図15 同 正面（持物・台座付）



図13 同 脚部正面



図14 同 像底

## 一 作品データ

本像は像高五四・四cm（二尺八寸）、髮際高四五・七cm（二尺五寸一分）、坐高三五・六cm（二尺一寸七分）を計測する<sup>(12)</sup>。

まず形状を述べる。

高髻（上から一・二・三・三束の四段に束ね目を表す）を結び、髻頂の前面に三頭形の飾りを付ける。地髪も髪束の束ね目を表し、後頭部では中央で左右に髪を振り分ける。また髻、地髪ともに全面に毛筋を彫刻で表す。髻髪は各一条が耳前に垂れ、さらに一条が耳半ばを渡る。天冠台は上下の縁に紐各一条が表されるようだが、やや判然とせず、また上下の紐の間の部分の文様の有無もよくわからない。

髪筋が両耳上で、天冠台に表された半截の花飾<sup>(13)</sup>をくぐるようである。地髪上正面に化仏を表したか否かは不明。白毫を表す。耳朶は紐状で貫通する。三道を表す。現状では胸および腹の括りは見えない。

覆肩衣を懸け、右腹部でこれを引き出して弛みをつくる。また覆肩衣は右腰脇より下方に垂下する。大衣<sup>(14)</sup>を偏袒右肩に着け、右肩に少し懸ける。大衣は両膝に懸かり、腹部から左肩にかけて縁を折り返している。裙を着ける<sup>(15)</sup>。左手は脚上で前方に屈臂、現状では掌を内向きにして軽く五指を曲げ、持物の未敷蓮華の茎を執る。右手は垂下させ、右腰脇で衣越しに掌で岩を押さえる。岩座上に遊戯坐。すなわち左膝を左斜めに立て、右脚は前方に垂下させ、第一指を少し跳ね上げている。左足先は着衣に隠れて見えない。

つづいて品質構造。

材種不明（ただし針葉樹<sup>(16)</sup>）。頭・体を通し、像の幹部は両耳後を通

る線で前後に矧ぐ。ただし割り矧ぎか別材を寄せるかは不明。頭・体ともに内刳する<sup>(17)</sup>。宝髻、左手首先、右足先を矧ぐ。像底はふさがり、像内は目視できない。ここに前後の矧ぎ目が認められないので、別材の底板を矧ぐものか。その他については後補の漆箔・彩色のため不明。

玉眼を嵌入する。黒目には墨を塗ってこれを赤で括り、目頭と目尻に青を注す。

宝髻最下段の束ね目の後方は半分ほど欠失している。白毫、左手首先、右足先、持物、すべての銅製装身具、表面の漆箔（肉身）および眉や髭・鬚等の墨描、彩色（頭部群青、着衣古色）、岩座、以上は後補。髻最下段の左右の束ね目に各一個の小釘孔があるが、用途不詳。

## 二 制作年代

最初に留意が必要と思われるのは、衣文の数を減じた着衣の表現である。一見すると、いわゆる写実には遠いと思えるかもしれない。しかしこれは、造像に際して典拠とした画像の特性に基づくものと考えられる。その画像とは、具体的な作例を特定することはできないが、墨画の観音像ではないかというのが筆者の推測である。

先にもふれたように、日本では遊戯坐の彫像は希少だが、視野を画像に広げるなら事情は異なる。とくに鎌倉時代後期から南北朝時代に掛けて制作された水墨画あるいは淡彩をともなう墨画の観音図に、片膝を立てるものを含め遊戯坐の像がまとまって見受けられる。それらが範を中国画に求めていることは確かだろう。たとえば米国



図16 白衣観音図（部分） 九州国立博物館

ネルソン・アトキンス美術館所蔵の伝顔輝筆・白衣観音図（元、十三世紀）などが想起される。

それら墨画の観音図において、観音像の着衣の衣文が数を減じ、象徴的に表されている点は極楽寺像に通ずるものであろう。

ただし極楽寺像の場合、頭部には鎌倉時代の菩薩像には多く認められる高髻が表され、墨画の観音像にしばしば見える白衣によって頭部を包む表現は行われていない。この点で参考になりそうなのが、九州国立博物館所蔵の絹本墨画淡彩白衣観音図〔図16〕である。同図は日本人画家による作と推定されており、鎌倉・円覚寺の開山となつた無学祖元に随伴して弘安二年（一二七九）に来朝した鏡堂覚円による着賛があるため、制作年を弘安二年から彼の没年である嘉元四年（一二〇六）の間に求めることができる<sup>(19)</sup>。

この白衣観音は岩上に坐して左足を垂下させ、右手で岩を押さえ

る姿勢で、頭髮は白衣に覆われず露出し、化仏立像と頭飾を表している。その面相は旧来の仏画のそれに連なるものであり、首から上だけを見ればあまり水墨画的ではないため、あるいは絵仏師が関与したかとも想像する。同様のことは極楽寺像にも指摘しうるだろう。つまり極楽寺像の作者はあくまで専門的仏師だが、体部の表現に水墨的な要素を取り入れて制作を行った。それが仏師自身の創意によるものか、造像願主の意向によるものかは確かめるべきがないが、このような考え方がもし当を得ているなら、本像の制作年代を考える際、頭部の表現に着目すればよいのではなからうか。再度眺めてみよう。

後補の漆箔・彩色と銅製宝冠のため、若干観察に難があるが、上下四段に結われた高髻や、両耳の上で髪筋が天冠台に表された花飾をくぐる装飾的な頭髮表現を認めうる。このような頭髮表現は、貞応三年（一二三四）肥後定慶作の像内銘をとまう京都・大報恩寺六観音像中の准胝観音像、同じく定慶作の嘉祿二年（一二二六）の京都・鞍馬寺聖観音像、また寛喜元年（一二三九）実明作の熊本・明導寺阿弥陀三尊像の両脇侍像などに端を発し、以後の菩薩像に散見されるようになる。ただし本像のそれは大報恩寺、鞍馬寺、明導寺像の髪に比べて形式化が進んでいることは否めず、自ずから時代差を感じさせる。

また本像の丸々と頬の張った卵形の面相、見開きの小さい細い目などは、文永六年（一二六九）院快・院静・院禅合作の滋賀・来迎寺阿弥陀三尊像の両脇侍像〔図17〕<sup>(20)</sup>や、同じ年に興阿弥陀仏が造つた愛媛・了月院阿弥陀三尊像両脇侍像〔図21〕<sup>(21)</sup>などを想起させる。宝髻の形状も近いといえる。したがって極楽寺像の制作期も





图19 勢至菩薩立像（三尊像右脇侍）  
頭部正面 滋賀・来迎寺



图18 同 頭部左側面



图17 觀音菩薩立像（三尊像左脇侍）  
頭部正面 滋賀・来迎寺



图22 同 頭部右側面



图21 觀音菩薩立像（三尊像左脇侍）  
頭部正面 愛媛・了月院



图20 同 頭部左側面



图24 同 頭部右側面



图23 勢至菩薩立像（三尊像右脇侍）  
頭部正面 愛媛・了月院

来迎寺像や了月院像に比較的近い頃ではないだろうか。すなわち鎌倉時代後期、十三世紀後半のやや降った頃ではないかと考える。さらにいうと、来迎寺像、了月院像のうち、極楽寺像の作風により近いのは前者である。卵形の顔、鼻や口が小ぶりで、目尻のあまり伸びない表情は似ている。あるいは極楽寺像もまた院派系の仏師の作である可能性も検討にあたいたする。

以上の主張が当を得ているならば、彫像における遊戯坐像として、鎌倉時代前期の愛媛・等妙寺像、同時代後期の山口・極楽寺像、西日本におけるこの二例の存在を知りうることとなる。遊戯坐の彫像作例が増加するのは鎌倉を中心とする東国において鎌倉時代後期になってからのことであるとしても、その発生については京都を含む畿内地域である可能性もあるだろう。これについては今後の検討にゆだねたい。

## 注

- (1) 浅見龍介『禪宗の彫刻』（日本の美術五〇七）至文堂、二〇〇八年
- (2) 倉田文作「伊予の彫刻」（文化財保護委員会『四国八十八箇所を中心とする文化財（愛媛県下）』所収、一九六四年）
- (3) 拙稿「木造菩薩（伝如意輪観音）遊戯坐像」（『国華』一四三五号、二〇一五年）
- 田邊三郎助氏も同像が中央からもたらされた像であろうと考えられたが、制作年代については南北朝時代とみなされたようである。
- 同氏『四国の仏像』（日本の美術二二六）至文堂、一九八五年
- (4) 極楽寺像の存在については武田和昭氏のご教示を得た。
- (5) 山口県教育委員会『未指定文化財総合調査報告書 彫刻編』一九八三年
- (6) 防府市史編纂委員会編『防府市史 資料Ⅱ 考古資料・文化財編』防府市、二〇〇四年

- (7) 個別作品解説の執筆者は明示されていないが、報告書に収められた白杵華臣「山口県の彫刻について」において「南北朝から室町時代初期ごろの製作と見られる」とある。個別解説も白杵氏の筆によるものである。
- (8) 彫刻の個別作品解説は白杵華臣氏と米屋優氏の分担だが、本像解説文は注(5)の『報告書』のそれとほぼ共通するので、やはり白杵氏の執筆かとみられる。
- (9) 牟礼は極楽寺の所在する岩畠も含まれる大字名。田屋は小字。注6に同じ。
- (10) なお『防長風土注進案』では験観寺を聖観音の道場とし、現観寺観音堂の項には朱書きで「聖観音 行基作」とあり、滝見観音とはされていない。
- (11) 調査は奈良国立博物館の岩井共二氏とともに二〇二一年三月八日に実施した。
- (12) その他の法量は次のとおり（単位cm）。
 

頂—顎	一四・七	面長	六・三	面幅	五・八
面奥	八・八	耳張	七・四	胸奥（中央）	九・四
肘張	一八・九	腹奥	一〇・六	膝張	一九・二
坐奥	一五・八	膝高（左）	一一・一	右足踏下長	一六・九
- (13) 左方ではよくわからないが、右方でこれを確認できる。
- (14) この衣はおそらく袈裟であろうが、現状で田相・葉ともに確認できないため、袈裟とは表記しなかった。
- (15) 合わせ目は不詳だが、あるいは左足左方か。
- (16) 注5・6の文献において材をカヤとしているが、その根拠は不明。私見ではヒノキの可能性がより高いと思われる。
- (17) 注5・6の文献において内刳のない一木造と記述するが、誤り。
- (18) 畑靖紀「鏡堂寛円賛 白衣観音図」（『国華』一三四七号、二〇〇八年）同『室町水墨画論集』所収、中央公論美術出版、二〇二二年）
- (19) 『日本美術全集 第9巻 室町時代 水墨画とやまと絵』作品解説（作品番号52、執筆荏開津通彦、小学館、二〇一四年）注18に同じ。
- (20) 宝髻後方の欠失部に現れた地髪の手影を見ると、後補の彩色によってかなり彫刻面が埋まっていることがわかる。
- (21) 銘記に三名の仏師の名が見えるのは中尊阿弥陀如来像の像内後頭部で



ある。三名が何をどのように分担したか確定できないが、三軀の像に微妙な作風の差異があるように思われ、三名が一軀ずつ担当したという考え方もあるだろう。その場合、筆頭仏師の法眼院快が中尊阿弥陀如来像を造ったことは同像足柄に院快の名が朱書されることから明らかであり、同じく法眼だが次席の院静が観音菩薩像、そして法橋院禪が勢至菩薩像を受け持ったとみるべきなのだろう。

#### 付記

調査ならびに写真掲載の許可を賜った極楽寺住職小林正純師にお礼申し上げます。

極楽寺像の写真は岩井共二氏とともに岩田が撮影した。その他についてはいずれも複写。出典は次のとおり。

図16…九州国立博物館白衣観音図 『日本美術全集9 室町時代 水墨画とやまと絵』(小学館、二〇一四年) 作品番号52

図17…来迎寺観音・勢至菩薩像 『日本彫刻史基礎資料集成 鎌倉時代造像銘記篇』第十一卷(中央公論美術出版、二〇一五年) 作品番号291

図21…了月院観音・勢至菩薩像 同右 作品番号293

(いわた しげき／奈良国立博物館学芸部特任研究員)

③その他

- ・奈良県文化財保護審議委員
- ・南京大学繆斯基基金芸術顧問

奈良国立博物館研究紀要

## 鹿園雑集

第二十四号

令和四年三月三十一日発行

編集発行 奈良国立博物館

〒630・8223

奈良市登大路町五〇番地

印刷・製本

株式会社天理時報社  
天理市稲葉町八〇番地